Osaka University Knowledge Archive

Title	英語前置詞atの〈場所〉義と〈時間〉義の意味的関係に関する考察
Author(s)	田尾, 俊輔
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2022, 2021, p. 31-40
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88339
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

英語前置詞 at の〈場所〉義と〈時間〉義の意味的関係に関する考察

田尾　俊輔

1. はじめに

本稿では英語前置詞 at の意味のうち、〈場所〉義と〈時間〉義に注目し、両者の意味的関係性について議論する。従来の研究では、at が示す〈場所〉義と〈時間〉義に関して、例文(1)に見られる「場所の一点」が例文(2)に示される「時間軸上の一点」に写像されて意味が拡張したと分析されてきた。例えば、(1a)は *10 Victoria Street* を地図上で点として指し、(1b)は *the airport* を俯瞰して点として捉えていると考えることができる。一方で、(2a)は 1 日 24 時間のうち *10:00 a.m.*を点として表せ、(2b)は 1 ヶ月の暦のうち最後の日を点として見なせる。

(1) a. They live at 10 Victoria Street.[1] (安藤 2012: 12)
　　b. He lost his wallet at the airport. (WEJD)
(2) a. The ceremony will begin at 10:00 a.m. (WEJD)
　　b. She will have arrived in France at the end of June. (安藤 2012: 13)

また、〈場所〉義と〈時間〉義のどちらの意味も取り出せるように at に対して「特定」という一つの意味 (＝単義) が抽出・付与される場合などもあった。しかしながら、例文(3)のように at の意味を単なる「一点」と捉えるだけでは説明しづらい事例が存在する。(3)では、「パーティーの場で」「卒業式で」「学校 (の場) で」のように〈場所〉の読みだけではなく、「パーティーの時に」「卒業式の時に」「学校にいる時に」のように〈時間〉の読みも可能になる。

(3) a. We met at a party. (安藤 2012: 12)
　　b. I hope to see you at the graduation. (WEJD)
　　c. Bill is no angel at school. (GEJD)

そこで本稿は例文(3)のような事例を〈場所〉義と〈時間〉義が混在するパターンとして分析し、at の〈場所〉義と〈時間〉義は意味的に完全に切り離されているわけではなく、連続していることを示す。

本稿の構成は以下の通りである。第 2 章では、at の〈場所〉義と〈時間〉義にまつわる先行研究を概観する。第 3 章では、〈場所〉義と〈時間〉義が混在する at の文例を分析・議論した後に、〈場所〉義と〈時間〉義の連続性について指摘する。第 4 章は本稿のまとめと今後の展望である。

[1] 本稿では、特に断りのない限り、提示した例文中の下線やイタリックは筆者が施したものである。

2. 先行研究概観

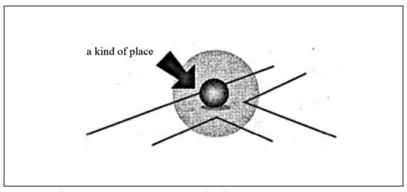
本章では at の〈場所〉義と〈時間〉義に関するこれまでの研究を概観する。とりわけ、〈場所〉義から〈時間〉義にメタファー的な意味拡張をしたと分析する研究 (= 2.1 節) や〈場所〉義と〈時間〉義に区分するというよりも抽象的な「特定」という意味を設定する研究 (= 2.2 節) を取り上げる。

2.1 〈場所〉義から〈時間〉義へのメタファー拡張

Quirk et al. (1985: 687) や木内 (2014: 220) には、〈場所〉を表す at の用法がメタファーとして〈時間〉を表す用法になったとの指摘がある。この指摘は英語学習用参考書の記載にもしばしば見られる。ここでメタファーとして意味が拡張するというのは、〈場所〉の領域において一点として取り上げられる位置が〈時間〉の領域において一点として取り上げられる位置とパラレルな関係にあるということである (詳細は Quirk et al. (1985) を参照) 。言い換えると、〈場所〉の領域で表される位置関係が〈時間〉の領域にも写像されるということである。例えば、以下の例文(4)では *10 Victoria Street* を一点として見なし、例文(5)では *the end of June* を一点として見なしている。そもそも〈時間〉は私たちの目に見えるものではない。そこで知覚可能な〈場所〉で一点を指す方法と同じ方法を使うことで、〈時間〉の概念を捉えることができるようになっているといえる。ここでの説明を図式化すると図 1 のようになる。

(4) They live <u>at</u> 10 Victoria Street. (= (1a))

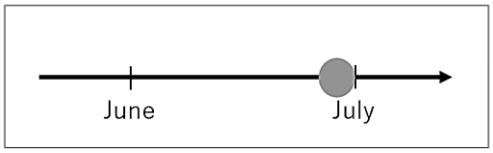
(5) She will have arrived in France <u>at</u> the end of June. (= (2b))



（田中・武田・川出(編) 2007: 80を参考に作成）

〈場所（空間）〉

↓ 別の領域に写像



〈時間〉

図 1：〈場所〉義から〈時間〉義へのメタファー拡張

at の中心的な意味を〈場所〉の一点と設定する研究は多くある。そして、この中心的意味が at に含まれる他の意味も説明できると言及されることもある (瀬戸(編) 2007: 61) 。例えば、木内 (2014: 221) は例文(6)にある *at night* という表現は漠然とした広がりをもつ夜をその瞬間、瞬間に任意の時点として捉えていると述べている。[2]

(6) John always works late <u>at</u> night. (安藤 2012: 13)

しかしながら、上述のメタファーによる意味拡張の説明を適用する場合、そもそも〈場所〉と〈時間〉は互いに異なる領域であるという前提があるため、すでに示した例文(3)のような〈場所〉と〈時間〉が混在した事例をうまく説明することができないという問題点がある。

2.2 単義としての〈特定〉義の抽出

次に、「単義」とは文字通り「一つの意味」のことを指し、ある語における抽象度の高い意味を想定した後に、そこからその語が有するすべての意味を文脈の影響を受けた異形として引き出せると考える方法である (Ruhl 1989、Tyler and Evans 2003: 37、田尾 2021: 32)。例えば、加藤他 (2015) は at の意味を下記(7)のように単義として設定すれば、他の at の意味も推測できるとする。

(7) [PP at NP] において、at は、「ある環境において指定されるべきものが NP である」という意味を持ち、かつそれ以上の語彙的意味を持たない。[3]
at の意味：〈特定〉

(加藤他 2015: 129)

次の例文(8)は〈場所〉における at の使い分けを示唆するものであるが、on は表面をもつものを要求し、in は中と外を区別する容器のような形を要求する一方で、at は形状についての条件はなく、場所を〈特定〉するだけだという (加藤他 2015: 129)。

(8) a. There are so many young people <u>on</u> the beach.
ビーチ（の表面上）には多くの若者がいた。

---

[2] 一方で、*in the night* だと夜を容器として捉えており、時間の流れが意識されるようになるとのことである (木内 2014: 221) 。例文(i)にあるように、「夜→昼→夜」という変化が認識されるという。冒頭の *by next morning* という表現に注目されたい。

(i) *By next morning*, however, the snow that had begun <u>in</u> the night had turned into a blizzard so thick that the last Herbology lesson of the term was canceled

(J. K. Rowling, *Harry Potter and the Chamber of Secrets*; 木内 2014: 221)

[3] ここでの PP は前置詞句 (Prepositional Phrase)、NP は名詞句 (Noun Phrase) を指す。

b. There are so many young people in the beach.
ビーチ（という空間の中）には多くの若者がいた。

c. There are so many young people at the beach.
ビーチ（という場所）には多くの若者がいた。　(加藤他 2015: 129、訳文は筆者)

その他にも、以下の例文(9)では得意なことが英語だと〈特定〉されていると考えることができる (加藤他 2015: 131)。

(9) Mary is very good at English. (安藤 2012: 12)

本稿での関心事である〈時間〉については、上記(7)の意味が時間という文脈に置かれて、とある時間を〈特定〉することになる。

(10) It starts at 9:30. (加藤他 2015: 130)

本節での単義という考え方は、意味をシンプルに表せるという点では魅力的である。それゆえに英語学習という観点からは単義的なアプローチが採用されることも多い。しかし、at の例文を詳細に観察すると例文(3)のような〈場所〉と〈時間〉が混在した事例が見つかり、これに対しては意味解釈が分かれ得るため、実際のところ何を〈特定〉しているのかがわかりづらくなるという問題がある。

3. 〈場所〉義と〈時間〉義が混在する at

前章の先行研究では、at について〈場所〉義と〈時間〉義を分けて考えるメタファー的な意味拡張や〈特定〉のような単義的な意味を採用すると、〈場所〉義と〈時間〉義が混在する at の言語事例 (= (3)) を説明しづらくなるということを確認した。そこで本章では、〈場所〉義と〈時間〉義のどちらにも解釈できる at の例文を観察・分析することで、at の〈場所〉義と〈時間〉義には連続性があることを示す。

3.1 at の目的語は場所的表現だが〈時間〉義にも解釈できる場合

at に場所的表現が続くが〈時間〉の読みもできる事例としては、次の例文(11)がある。ここでは単なる場所だけではなく、その場所で起こっている出来事が想起されるのではないかと考えられる。例えば、例文(11a)ではパーティー会場では何らかの催しが開かれていることが想定でき、(11b)では卒業式会場では式典が開かれていることが予想される。また、(11c)では学校での生活や振る舞いが思い浮かぶ。そして、それぞれ「パーティーの時に会った」「卒業式の時に会う」「学校にいる時は悪ガキだ」と〈時間〉義で訳すことが可能である。

(11) a. We met at a party. (= (3a))

b. I hope to see you at the graduation. (= (3b))

c. Bill is no angel at school. (= (3c))

さらに、例文(12)は空港で財布を無くしたという出来事が描写されている文であり、これについても「空港にいる時に財布を無くした」と〈時間〉義で訳せる。

(12) He lost his wallet at the airport. (= (1b))

その一方で、その場所で起こっている出来事が想起されない場合には〈時間〉の読みはやや困難になる。例文(13)は「家にいる (家の) 時にいる」(=〈時間〉義) にするとかなり冗長な訳となり、単に「家 (という場所) にいる」と〈場所〉義で訳せばよい。(14a)についても(13)と同様である。ただし、(14b)は *with some friends* という修飾語が付加されており、友だちと何かしていたことが想起されるため、「パーティーの時に友だちと一緒にいた」と〈時間〉義で訳しても自然になる。

(13) I'll be at home all morning. (WEJD)

(14) a. I was at a party. (作例)

b. I was at a party with some friends. (瀬戸(編) 2007: 61)

このように、at に場所的表現が後続する場合であっても〈時間〉義として解釈可能なことがある。ここでは〈場所〉義と〈時間〉義が混在している中で〈時間〉義に焦点が当てられる場合であり、図 2 のようにまとめることができる。

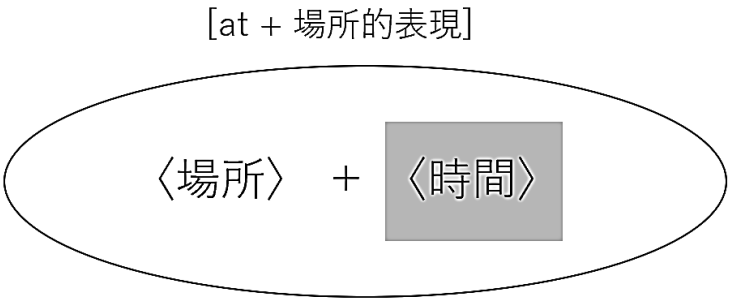


図 2：〈時間〉義に焦点が当てられる場合

3.2 at の目的語は時間的表現だが〈場所〉義にも解釈できる場合

次に、at に時間的表現が続くが〈場所〉の読みも可能である事例としては、例文(15)が挙げられる。「平和」や「戦争」はその状態が時間的な広がりを持つ時に成り立つ概念である。その意味において、*peace* や *war* は時間的表現であるといえる。しかしながら、(15a)と(15b)はそれぞれ「世界は平和な場であった」「イングランド(軍)は戦争の場にいた」と〈場所〉義で訳すことが不可能ではない。

(15) a. The world was <u>at</u> peace.
b. England was <u>at</u> war with Hitler's Germany. (瀬戸(編) 2007: 62)

なぜ時間的表現が〈場所〉的に解釈可能になるのかについては、at が時間をどのように捉えているのかというところが関わっている。例えば、次の(16)は明らかな時間表現である。しかしながら、例文(17)のような一時点を表す at とはやや異質であり、(16)は時間的な幅があるにもかかわらず at を伴っている。この現象を説明する際によく用いられる考え方としては、「クリスマスの時期」あるいは「週末」を一つのまとまり (= 点) として捉え直しているというものである。ただし、そのような捉え直しが可能な理由が述べられることはほとんどない。

(16) a. <u>at</u> Christmas time
b. <u>at</u> (the) weekend(s) (WEJD)
(17) a. The ceremony will begin <u>at</u> 10:00 a.m. (= (2a))
b. She will have arrived in France <u>at</u> the end of June. (= (2b))

そこで、上記(16)のような表現が可能な理由として〈場所〉的情報も影響を与えているということを提案する。一つのまとまりとして捉えられるということは、まとめられるものは類似している、あるいは同質である必要がある。具体的には、*Christmas time* には特有の雰囲気や催しがあり、それが数日続くため、クリスマスの時期を同質のものとして捉えることができる。また *weekend(s)* は仕事をせずにどこかで遊んだりのんびりしたりする時間が展開されており、その点で週末の日々は同質のものとして捉えることができる。したがって、*Christmas time* にも *weekend(s)* にも何らかの出来事があり、その出来事には〈場所〉的情報も含まれているといえる。このように考えると、例文(15)で〈場所〉義のように解釈可能な理由は、平和や戦争の時に特有の出来事が起こる場所が関係しているからだと説明することができる。

上記のように、at に時間的表現が後続する場合であっても〈場所〉義として解釈できる場合がある。これは〈場所〉義と〈時間〉義が混在している中で〈場所〉義に焦点が当てられる場合であり、図 3 としてまとめることができる。

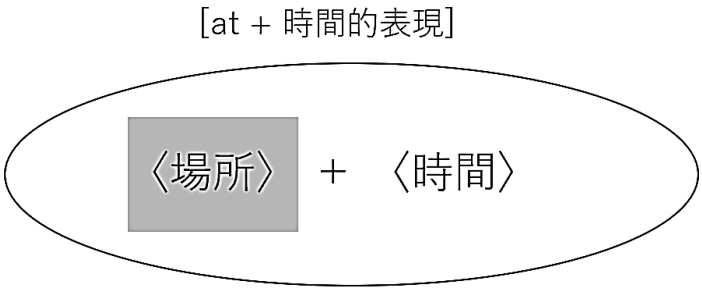


図 3：〈場所〉義に焦点が当てられる場合

3.3 at の〈場所〉義と〈時間〉義の連続性

上の 3.1 節および 3.2 節での議論から、at の〈場所〉義と〈時間〉義は完全に切り離されるものではなく、実際のところは下記の(18)及び図 4 に示すように連続体を為しているのではないかと想定される。なお、(18b)と(18c)の部分が本稿で主に議論した〈場所〉義と〈時間〉義が混在する at となる。

(18) a. 〈場所〉義のみの解釈の場合

They live <u>at</u> 10 Victoria Street. (= (1a))

I was <u>at</u> a party. (= (14a))

b. 場所的表現が後続するが〈時間〉義にも解釈できる場合 (= 3.1 節)

We met <u>at</u> a party. (= (11a))

Bill is no angel <u>at</u> school. (= (11c))

He lost his wallet <u>at</u> the airport. (= (12))

I was <u>at</u> a party with some friends. (= (14b))

c. 時間的表現が後続するが〈場所〉義にも解釈できる場合 (= 3.2 節)

The world was <u>at</u> peace. (= (15a))

England was <u>at</u> war with Hitler's Germany. (= (15b))

d. 〈時間〉義のみの解釈の場合

The ceremony will begin <u>at</u> 10:00 a.m. (= (2a))

She will have arrived in France <u>at</u> the end of June. (= (2b))

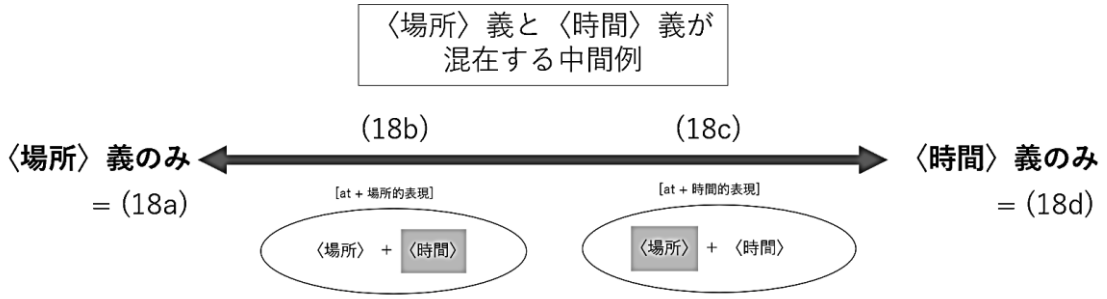


図 4：(18)の図式化

上の(18)や図 4 に示されるように、at の〈場所〉義と〈時間〉義はきれいに切り分けられるものではなく段階性があるのだとすると、〈時間〉義 (= (18d)) は〈場所〉義 (= (18a)) からのメタファー的意味拡張であるという説明 (= 2.1 節) だけでは(18)全体を説明するのは難しくなる。[4]というのも、(18b)や(18c)のように隣接関係下で少しずつ意味がずれていく事例があり、ここにはメトニミー的意味拡張が関与している可能性があるからである。また、単義としての〈特定〉義を抽出する説明 (= 2.2 節) であっても、(18b)や(18c)の意味のずれを指摘するには細かな文脈を設定する必要があり、説明に相当の工夫が必要になることが予想される。

4. まとめと今後の課題

本稿では、英語前置詞 at の意味のうち、特に〈場所〉義と〈時間〉義を取り上げて、両者の意味的関係性について議論した。従来の研究では、場所における一点が時間における一点に写像されるといったように、〈場所〉義から〈時間〉義へのメタファー的意味拡張が主張されることが多かった。また、at のあらゆる意味用法に当てはめることができる抽象的な意味を取り出そうとする動きも多い。しかしながら、本稿での議論から、〈場所〉義と〈時間〉義が混在する事例が存在し、意味的に少しずつずれながら連続体を為していることが明らかになった。これは、メタファー的な意味拡張を考えたり、抽象的な意味を取り出したりするだけでは説明しづらい事例である。

ただし、本稿では紙幅の関係上、十分な分量のデータを分析することができていない。例えば、(18a)-(18d)で示された各段階において、実際のところどのくらいの文例数があるのかという調査はできていない。これらの頻度情報を組み込むことで、at の〈場所〉義と〈時間〉義の関連性はより明らかになると思われる。

また、今回議論した事例が at 自体の意味にすべて帰着させてよいのかということについても、別途検討を重ねていく必要がある。例えば、以下(19)に再掲した文では「学校

[4] そもそも「時空間 (space-time)」ということばが存在することから、場所 (空間) と時間は何らかの関係性があるということは想定できる。

(の場)で」とも「学校にいる時に」とも訳せるとすでに指摘したが、これらの意味は *school* によって喚起されているのではないかという疑問もある[5]。確かに *school* が「子どもたちが勉強や活動をする場所」といった背景知識があるからこそ、上記の〈場所〉義や〈時間〉義の解釈が可能だと判断できるともいえる。しかしながら、*school* という語単体では〈場所〉義と〈時間〉義の区別はできないため、前置詞 at も含めて検討を進める必要があると考えられる。

(19) Bill is no angel at school. (= (11c))

さらには、本稿で議論した at の〈場所〉義と〈時間〉義の意味的関係性は、at の意味が織り成すネットワーク全体ではどのような役割を果たしているのかというマクロな視点での分析も求められる。例文(20)をはじめとして、at は〈場所〉義 (=(20a)) と〈時間〉義 (= (20b)) 以外にも多様な意味を持つ。at の意味ネットワーク全体を意識しながら、個々の意味間の関連性を検討していくことも今後の課題として挙げられる。

(20) a. Julie is at the post-office. 【場所】 (Herskovits 1986: 128)
b. She will have arrived in France at the end of June. 【時間】 (= (2b))
c. I bought these books at a dollar each. 【価格・速度等の目盛り】 (安藤 2012: 13)
d. John shot at the elephant. 【目標】 (岡本他 1998: 1)
e. I was surprised at the news. 【感情の原因】 (安藤 2012: 15)
f. Mary is very good at English. 【得意・不得意の対象】 (= (9))

以上に示した課題については、また別稿にて取り上げることにしたい。

参考文献

安藤貞雄 (2012)『英語の前置詞』東京: 開拓社.
Herskovits, Annette (1986) *Language and Spatial Cognition: An Interdisciplinary Study of the Prepositions in English*. Cambridge: Cambridge University Press.
加藤鉱三・花崎一夫・花崎美紀 (2015)「At の意味論」『英文学研究支部統合号』7: 127-135.
木内修 (2014)「at の意味論的考察」『東洋大学大学院紀要』51: 207-226.
岡本順治・佐々木勲人・中本武志・橋本修・鷲尾龍一 (1998)「打撃・接触動詞の動能交替と結果の含意」『東西言語文化の類型論』: 173-192.
Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

[5] これは由本陽子先生から指摘いただいたご助言である。ここに記して感謝申し上げる。

Ruhl, Charles (1989) *On Monosemy: A Study in Linguistic Semantics*. Albany: State University of New York Press.

瀬戸賢一 (編) (2007)『英語多義ネットワーク辞典』東京: 小学館.

田中茂範・武田修一・川出才紀 (編) (2007)『エクスプレス E ゲイト英和辞典』東京: ベネッセコーポレーション.

田尾俊輔 (2021)「多使用論の建設的検討：英語前置詞 at を例に」『認知・機能言語学研究』6: 31-40.

Tyler, Andrea and Vyvyan Evans (2003) *The Semantics of English Prepositions: Spatial Scenes, Embodied Meaning and Cognition*. Cambridge: Cambridge University Press.

辞書

井上永幸・赤野一郎 (編) (2003)『ウィズダム英和辞典：第 3 版』東京：三省堂. (WEJD)

小西友七・南出康世 (編) (2001)『ジーニアス英和大辞典』東京: 大修館. (GEJD)